首を横に振り、自分も月に一、二度、専ら平日に竿を出していたのだが、四年前、高齢だからと、とうとう家族から川立ちを禁止されてしまった。『川立ちは川に死す』ということわざもある、自分もそろそろ潮時だと竿を置いたのだが、それでも毎年、解禁の時期になると、居ても立ってもいられない気持ちになり、こうして弁当だけを持って相模川にやってくるのだと話した。

「そうでしたか。それではお会いできなかったのも無理はないですね」

そういって剛田はうなずいた。

「それにしても梁瀬さんの竿さばきが、もう二度と見られないというのは本当に残念です。鮎をかけたときの、流れの緩急、水の増減にまったく影響されない寄せのみごとさは、経験の浅い私には、まさに神技に見えたものでした」

剛田の言葉に甲蔵さんはクックックッと照れ臭そうに笑った。

「このあたりはコロガシの鮎師も多いだろうに、よく友釣りを続けていらっしゃる」

甲蔵さんがそういうと、剛田は幾分胸を反らせた。

「友釣りは昔も今もむずかしい釣法ですが、釣趣がまた格別です。一度虜になったら到底やめられません」

剛田は礼をいってマグカップを返すとオトリ缶の蓋を開けた。途端に独特の香りが辺りに充満した。

「さすが香魚と呼ばれるだけのことはある。なんと爽やかな香りだ」

そういって絶句しつつ、甲蔵さんは、剛田に促されてオトリ缶に手を入れた。何匹もの鮎の背が、指先に触れてはするりと逃げていく。ようやく七寸ほどの鮎を手のひらに乗せた甲蔵さんは、慈しむようにその姿を眺めた。

鮎は盛んに口を上下させている。漆器のように滑らかな魚体に黄金色の追い星がみごとだった。慎重な手つきで、甲蔵さんはオトリ缶に鮎を戻した。

「ひさしぶりの野鮎の感触に、胸が震えました」

甲蔵さんが感嘆の声を上げると、剛田は相好を崩した。

「なかに二つ、三ついいのがいます。かかったのがトロ場で助かりました。瀬では寄せることすらできなかったでしょう」

そういいながら、剛田はオトリ缶の蓋をロックした。

「二〇年ほど前になるが、私もこの少し上流で九寸ほどのを掛けたことがあります。平瀬だったが、竿尻が破裂したような衝撃を受けてひどくあわてた。寄せるまでに一〇〇メートルは下りました」

甲蔵さんは少し大げさに自分の体験を話した。

剛田はふんふんとうなずいた。

「大人げない話ですが、今日のように釣果が上がると、本当に夢にまで見ますね。次の週末が待ち遠しくてなりません」

「この歳になると、時の流れの速さには驚くばかりですが、それでも毎年ここに来ないと、年が変わった気がしない。夏が訪れる気がしないのです」

「私もこの歳になってようやく水の色に月日の移ろいを感じるようになりました」

剛田の言葉に甲蔵さんは深くうなずいた。

「私はこの川に立ち込む夢を今でも見ます。不思議なことに、その夢には確かに色がついている」

「天然色ですか。そいつは羨ましい。それにしてもまだまだ未練がおありのようですね」

「まったくです」

そういって二人は笑った。

深い樹々の合間から、淵や白波の続く瀬が見える。この辺りから遊歩道は、相模川左岸を少しずつ離れ、支流の鳩川上流へと続いていく。途中を折れて市道に入れば、海老名駅は、もう目と鼻の先になる。

後ろ髪を引かれる思いで歩いていた甲蔵さんは、鳩川に真新しい木橋が架かっていることに気がついた。

（はて、いつの間に）

誘われるままコトリ、コトリと甲蔵さんは橋を渡った。足下では鳩川の清冽な流れが川辺の葦を揺らしている。少し息を切らしながら対岸の丘に登った甲蔵さんは、眼下に広がる光景に思わず息を呑んだ。

分け入れば、背も隠れてしまいそうなみずみずしい緑の草原が、渡る風を受けてまるで大河のごとく、瀬、トロ、あるいは淵を形成していた。その輪郭を縁取るように、銀色に輝く相模川が遠く蛇行し、丹沢・三峰連峰の群青が、白雲を湛えて西の空にそびえていた。

よろよろと丘を下り、河川敷の縁にたどり着いた甲蔵さんは、憑かれたように背からリュックを降ろし、愛竿を引き抜いた。五、六間はあろうかという長竿を、肩にはさんで片膝をつき、素網の中で素早くオトリ鮎にハナカンを通す。立ち上がって流れに放つと、オトリは勢いよく上流に向かった。狙いはトロ場と瀬との境、瀬肩にある二つの大石の間だ。甲蔵さんはわずかに竿を立てたのみで、糸は張らない。得意の泳がせ釣法だ。すぐにオトリが野鮎に追われる前アタリがあり、その直後、竿尻に衝撃がきた。良型だ。一気に下流に走ろうとする二匹の鮎の動きを、一歩も動かず、竿さばきだけでいなして、浅瀬に引き寄せる。右手で竿を握り、左手で腰から網を抜くと一度それを竿に添えて両手で抜き上げにかかり、竿が頂点に達したところで網を構えた。水面から飛び出した二匹の鮎は、銀鱗を閃かせて宙を飛び、一瞬で網に収まった。甲蔵さんは釣れたばかりの尺近くあろうかという大鮎を、間髪を入れずにオトリと交換し流れに放つ。再び水に戻った野鮎は、己の身に何が起きたのかさえわからないほどの素早さなのだ。

甲蔵さんは今、愛竿を通じて勢いよく泳ぐオトリの動きを、川底の変化を、水の流れを、そしてひしめく鮎の群れと豊饒の世界を感じとっている。

（さあ、追ってこい）

流れに逆らいながら、オトリ鮎は力強く上流に向かっていく。右手で竿尻を持ち、左手は握るでも掴むでもなく、親指と人差指でわずかに竿を支える程度である。

コロコロところがるサッカーボールを、イガグリ頭の少年が追いかけている。ボールはオレンジ色のリュックに当たってようやく止まった。

立ち止まった少年は、老人に気がついた。河川敷に向かって不思議なしぐさを続けるその姿を、少年はしばらくの間、もの珍しげな眼差しで見つめていたが、すぐに飽きたらしく、ボールを拾って父親のもとに戻った。

「パパ、あそこのあのおじいさん、なんだか変な格好をしているよ。体操かな」

息子に生き移しの若い父親は、老人の振る舞いを見てすぐに思い当った。急逝した彼の父もまた、友釣りをこよなく愛していたからである。

「あれは鮎釣りをしているんだよ」

「釣竿も持っていないのに？」不思議そうに少年はいった。

「そうだよ。名人は、釣竿を持たなくても、心の中で鮎を釣ることができるんだ」

生まれてから十年もたたない子供には、理解し難いことだろうなと考えながら、父親は息子と向き合ってボールを蹴り始めた。

そういえば彼がまだ幼いころ、ちょうど今の彼の息子ぐらいの年齢だったろうか、川に立ち込む父の姿を一度ならず見つめていた覚えがある。天を突くかと思うほどの長竿を自在に操り、次々に野鮎を掛ける父の姿が、今でも目に焼きついて離れない。いったいその時父は何匹釣ったのか、自分はただ岸に立って父の姿を眺めていただけなのか。その時母は一緒ではなかったのか。

早くして父と死に別かれたせいか、その後彼自身は鮎釣りに没頭することはなかったが、父の記憶の中で真っ先に思い浮かぶのが、川に立ち込んで長竿を振るその姿と、川から上がり、満足げな表情を見せている父を見上げたとき、背後にぽっかりと浮かんで見えた白雲、そして忘れることのできないあの匂い…

「パパ、西瓜食べたい」

父親は、はっとして息子の顔を見た。

「なんだい、やぶからぼうに」

「だって、あのおじいさん、なんだか西瓜のいい匂いがしたんだもん」

そういいながら少年は照れ臭そうにボールを足でこねている。

父親は老人の後ろ姿を見た。その瞬間、彼には、老人の持つ鮎竿が確かに見えた。

老人は竿を寝かせて上手に止め、わずかに引いている。やがてその穂先がゆっくりと天を向くと、二匹の鮎がもつれ合いながら宙を舞うのが確かに彼には見えたのである。

不意に彼は老人に話しかけたいという衝動にかられた。近づいてあの懐かしい匂いを嗅いでみたい。

父の身体からなぜ西瓜の匂いがするのか、かつて彼は尋ねてみたことがある。そのとき父は笑ってこういった。

「きれいな水が流れる川の石には、おいしい水垢がつく。それをたくさん食べると、鮎は西瓜の匂いになるんだよ」

そういいながら、片手で軽々と彼を抱き上げた、たくましい父の身体が、そのときすでに病魔に蝕まれていようとは。

視線を戻すと、彼は息子の肩にそっと手を置いた。

「そうだな。なんだか父さんも西瓜が食べたくなってきたよ。季節にはまだ少し早いけどお店に探しにいこうか」

「うん、うん」

少年はうれしそうにうなずいた。

海老名駅に着いた甲蔵さんは、もう一度名残惜しそうに川の方角を振り返った。

今、丹沢三峰を茜色に縁取りながら沈みゆく夕日は、見渡す限り続く水田にも映り、空も大地も燃えるようだった。

（秋に竿を持ってきてみようか）

唐突に、よからぬ考えが甲蔵さんの脳裏に浮かんだ。愛竿は、長い間納戸の奥に仕舞い込まれたままになっている。たまには外に出して、具合を確かめてみることも必要だろう。チャラ瀬は石が滑って多少危険だが、膝下までのトロ場なら大丈夫に違いない。

「おとうさん」

不意に声がして、思わず甲蔵さんは、その場に直立不動となった。

「はい、かあさんや」

「また、釣りにお出かけになるおつもりですか」

「いやあ、その…」

「川立ちは身にこたえると、あれほどいってらしたではありませんか。お忘れですか」

身にこたえるからこそ、大釣りした時の喜びがまた格別なのだ、と甲蔵さんはいいたいのだが、それでは妻の言葉を肯定することになってしまう。

「はい、もちろん心得ています」

努めて冷静な口調で甲蔵さんはいった。

「とうに竿は置きましたから」

甲蔵さんは、こうして月に何度か亡き妻と話をする。最近、その回数が増えつつあり、甲蔵さんは内心好ましく思っているのだが、そのことは妻にはいわないでいる。

「それを聞いて安心しました。それから幸江さんのおむすびの塩かげんは、おとうさんの身体を思ってのことなのですよ」

「もちろん承知していますとも」

「それではのんびりいらしてくださいね」

「はい、ぼちぼちとまいります」

いつの間にか稜線のかなたに日は沈み、風景は一変して深い緑一色となっている。甲蔵さんはもう一度深呼吸をしてからゆっくりと歩き出した。

改札を抜けたオレンジ色のリュックサックはしばらくの間、行き交う人々の間にヒョコリ、ヒョコリと見え隠れしていたが、やがてろうそくの火が消えるように、その姿は見えなくなった。

了

さし絵　大滝昌也

選評【小説部門】

選考委員　岡崎　満義
（元文藝春秋編集長）

原稿用紙（400字詰）20枚以内で小説を書くのは、プロの作家でも容易なことではない。今回、創設された『えびな・いちご文学賞』は「海老名市の土地と土を主役あるいは舞台背景」とし、「新鮮な『いちご』のような感性で捉えた文学作品」を求めている。作品の中に、ローカル色豊かな風土性が期待されている。なかなかきびしい条件がつけられている、といえよう。

そこで最終候補21篇の中から、大賞、優秀賞各1篇、佳作4篇を選ぶにあたって、自分なりの基準を作ってみた。まず、登場人物がいきいきと動いているか、存在感があるか、人間についての深い思いが表現されているか。もう一つは、読みやすい、いい文章であるか。小説的な色合いの濃淡には、あまりウェイトをおかないことにした。とにかく、読む者の胸をうつ力が強いかどうか、である。（中略）

大賞の蒔田淳一『甲蔵さんの川』

鮎の友釣りの名人・甲蔵さんは、82歳という高齢になって、釣りができなくなっているが、相模川が忘れられなくて、シーズンになると、弁当持参で釣りを見に行く。かつて友釣りの極意を手ほどきした初老の剛田との心の通う会話を通して、川のトロ場が瀬に続くポイントに立つ鮎師の魅力、友釣りの醍醐味、西瓜の香りが立つ野鮎の清らかな姿……などの的確な描写から、川をこよなく愛する人間たちの人生がひしひしと伝わってくる。

劇中劇のように挿入された若い父子の出現は、本来のストーリーとは関係ないように見えて、若い父の鮎にまつわる思い出が、作品全体にふくらみを与えていて効果的だった。

作品の最後を亡き妻との会話でしめくくったのもよかった。作品のタイトルが『甲蔵の川』ではなく、『甲蔵さんの川』であることが納得できるあたたかさが全体にあって、心地よく読めた。とにかく文章がいい。（以下略）

入賞作品集は4月2日からお配りします。詳細は本紙1面をご覧ください。